

パートナー喪失に対するレジリエンス —認知症治療病棟での性差から—

江別医師会
江別すずらん病院

やすだ もとじ
安田 素次

学生時代に観た映画の結末で男女差が印象的な2作品があった。

一つは「風と共に去りぬ」での女性主人公スカーレット・オハラが夫レット・バトラーに去られても、タラの大地に立って「明日は明日の風が吹くと」と決意する場面。

もう一つは「道」で男性主人公ザンパノが自ら見捨てたはずのジェルソミーナの死を知って浜辺で思わず慟哭する場面……。

男性は強く逞しくなければ、女性はいか弱きもので庇護すべきとどこかで無意識に教えられたおそらく最後の世代、団塊の世代の私には妙に鮮烈な体験だった。

そして一疑問が残った。あまりにも喪失に強い女性像とそれに弱い男性像……この描写の違いは果して製作者の空想の産物に過ぎないのだろうか、それとも秘められたある事実の象徴なのだろうか……。

後年30年近くになる認知症治療病棟勤務で、あの時観たシーンは絵空事ではないと痛感するようになった。

以下最近病棟で経験した男性三人のエピソードから……。

81歳女性の退院を控えて、看護師長から提案があった。

「褥瘡対策でご主人に訪問看護師の定期訪問を説得しては？ ケアマネの方からの誘いも『俺が一切面倒を看ているから良い』と頑として受け入れません」

「近頃かつてなく体の動きが乏しく、不活発にみえます。今後、褥瘡発生のリスクがあります。夫婦二人暮らしでの受診も大変でしょう。訪問看護師の技術と助言を利用するのは如何でしょう。介護の悩み相談という意味もあります。奥様はもう81歳ですね」しもの世話までしているという10歳年下の夫は「まだ70歳で体力はあります。妻のデイサービス参加中に体を鍛えておりますし……」 「外からの人はとても……私でなければ」と渋る。「若い頃は妻から食事の世話から何くれとなく随分世話になったから」とも……。「良くやるな……」とつぶやくと師長以下スタッフ全員が「私たちなら夫が10歳年上であればすぐに施設送りよ！」と口をそろえる。彼の涙ぐましい努力とそんな彼女たちの本音から、ひょっとして男性は女性よりも本質的には義理堅く情が深いのかもと思ってしまう。

一方で配偶者への暴力で緊急入院した78歳男性は入院後の薬物調整で速やかに落ち着き、笑顔さえ見せるようになった。自宅に戻り、デイケアを利用するのは如何？ と妻に提案するも当時の心的外傷が癒えず、もう少し面会で様子を見させてほしいとの希望だった。だが面会は1回きりで、息子のみの面会

が繰り返された。結局、妻は「これを機会に一緒に暮らしたくない」との決意で、周囲の説得に聞く耳を持たない。さりとて一人暮らしは期待できない。やむなく老健を経由してどこかの施設に入居してもらう方針となった。入院を哀願する妻の要請で「たまたま塵肺の悪化による低酸素脳症のために治療が必要」とだまし討ちするように説得した。本人からは「塵肺は以前からのもの。いつになったら低酸素脳症が治って家に戻れるのか」とその後穏やかになって問われるときがとりわけつらい。次の老健施設にはそのリハビリのためにと嘘をつかなければならない。退院時の落胆する表情が見るに堪えない。

「先生！いつになったら退院できるでしょうか？」
79歳の男性が聞いてくる。

「娘さんたちが施設入所を探しています、それが決まるまでは……」

「家内が自宅で待っているはずだけど……」

「え！家内が死んでもういない！！」

「葬儀にも参列されているはずですが……」

毎回繰り返される会話である。

このような認知症の男性患者さんに配偶者の他界を繰り返しあらためて告知せざるを得ないときほど病棟スタッフ側の切ないことはない。

それにつけこれまでの入院診療でしばしば経験することだが、男性は長い結婚生活を経ても一度配偶者から疎んぜられると認知症周辺症状を契機にきれいさっぱり見限られる・見捨てられてしまう性だとしみじみ思う。ライオンの雄がその機能が失われたと判断されるやあっさりと雌たちから見捨てられるのをつい思い浮かべてしまう。また同じ退院要求でも妻との再会に必死になる男性に比して、女性の場合「夫が待っているから」という訴えをほとんど聞いたことがない。無論実際に入院時夫が先に逝去していることが多い事情もあるが、それにしても……である。

背景にパートナー喪失に対する感受性が男性と女性では生来的に違いがあるのではないかと？ その性差が高齢化とともに顕在化してくる？？ 過去の文学でも夫が故妻を探すがあっても、妻が故夫を探し求める作品を寡聞にして知らない。日本映画でも溝口健二監督により映画化された雨月物語「浅茅が宿」のエンディングに示唆的なシーンがある。主人公の男性が自ら出奔して妻子を捨てて年余のあげくの帰郷でありながら、妻がすでに亡くなっていることに茫然自失する。そこでも喪失に対するより脆弱な男性の性が見事に表現されている。

私も配偶者を先に失い、認知症になったら同じことが起こるのではと75歳の後期高齢者を迎えて怯える日々である。これらの映画のフラッシュバックとともに、妻に対して日に日に気弱になって行く自分がある。認知症治療病棟に勤めてこなければもっと強気の夫でいられたのに……職業を間違えたのかもしれない。